

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372800807		
法人名	社会福祉法人 蘇南会		
事業所名	グループホームすみれ		
所在地	熊本県上益城郡山都町北中島2679-3		
自己評価作成日	平成24年10月29日	評価結果市町村受理日	平成25年1月8日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://ncfp-77/www.tukushi-kumamoto.or.jp/smst/mpt/pub/default.asp?c_id=26
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	平成24年11月22日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

自然環境豊かで、ホームの共有スペースは狭いが戸外の環境を日常的にケアに生かすことができる。また、職員は個々の利用者を理解することで、利用者の力や得意なことを日常生活にスムーズに生かすように努めている。職員のほとんどは介護福祉士取得し、質の高いケアに努めている。性別や年齢差のある職員が互いの長所や個性や経験などをケアに生かして、職員もホームの中で楽しめるようにしている。
 家族会も協力的で、季節の野菜や果物その他の食品の差し入れなど、日常的に気軽に頂ける関係がある。複合施設の利点を活かし、関連施設へ移られた場合にも、流れのある支援が可能であり、職員も努力している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

法人が運営する福祉施設が広大な敷地に点在し、その中の一事業所であるホームは小規模でかわいいうちの外観からも、そこに集う人々の“自宅”という表現がもっともふさわしい所である。入居者は常に目の前の自然の移り変わりを肌で感じ取り、自由に玄関先に出て野菜の育ち具合を確かめ、日光浴を楽しみ、隣接する保育園児たちの訪問を心待ちにしながらどこにでもある日常を過ごしている。福利厚生の実施や職員の資格取得への意欲、仕事への情熱は離職のない職場環境を作り、入居者へぶれない支援を提供している。ホーム長は認知症啓発の拠点として機会あるごとに情報を発信し、高齢化が進む当地域で専門性を活かしながら高齢者福祉に寄与しており、家族も事あるごとにホームを訪れ、地域の中の一人として入居者の生活継続を支えている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員全員で作上げた理念があり、常に念頭において実践している。	開所当時からの理念はホームの中にしっかりと根付いており、職員は日々のケアの規範として三項目の内容を正確に捉え実践に繋げている。ホーム長は異動によりホームに配属された職員へ、地域密着型事業所について理念を交えながら指導し、年度初めには運営推進会議で地域へ向けホームの取り組みや姿勢を伝えている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	運営推進会議等を活用して地域の行事や活動に参加し、できる限り交流を深めており、日常的な交流とまでは言えないがスムーズな交流が来ている。	地域サロン`おたしや会`には毎月参加して顔馴染みの関係を作り交流を継続している。推進会議で齎された情報を基に、校区のフェスティバルや珍しい魚のつかみ取り大会などの地域行事に、家族へも声かけしながら積極的に出かけている。地理的環境から近隣者が日常的に訪れることは望めないが、食材の配達で訪れる地域の人々や隣接する保育園児との交流は続いている。保健福祉センターを会場として開催される`認知症家族の会`で、ホーム長は、専門的な立場から認知症への理解や啓発に努め地域貢献に一役を担っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域や団体の会合に参加し、認知症や認知症の人についての理解について話す等、事業所で培った知識や経験を地域に役立てるようにしている。山都町認知症家族の会に、毎月参加している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議を通して、委員の方々には認知症についての理解を深めてもらっている。また委員とは地域とのパイプ役として、事業所運営や地域交流を深めるために連携し、サービスに生かしている。	二ヶ月毎の会議は定着しており、毎回多数の地域代表者が参加して、議題を設定し参加者からの意見や提案を収集している。地域で暮らす高齢者の情報を共有したり行事をリサーチし外出支援に繋げている。管理者は経験を活かし認知症介護の冊子を引用しながら認知症の人々の行動や心の動きについて分かりやすく話をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議や研修その他、必要に応じて日常的に連携をとり、協力関係を築いている。地域包括ケア担当者連絡会や認知症家族の会においても毎月情報交換・連携を行っている。	行政からの推進会議への参加や、町のネットワークの一員として法人と共に連携を図っている他、ケアマネ会議や包括担当者会議に参加し行政担当者より制度改正について話を聞いたり、情報交換を行うなど常に連携をとっている。ホーム長は、書類提出などで行政を訪れ、何かあれば何時でも連絡を取るよう努めており良好な関係を継続している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員は、身体拘束に関する具体的な行為について理解しており、身体拘束をしないケアの実践に努めている。スピーチロックについても威圧するような声掛けをしないように気をつけている。	職員は身体拘束の一つひとつの行為について正しく認識しており、行わないことを前提としてケアに当たっている。一人ひとりの顔の見えるリビングや玄関は常にオープンであり、入居者は自由に玄関先に出て育てた野菜を見たり、広大な敷地の景色を楽しんでいる。ホーム内の研修で更に職員間の共通認識を深め日々のケアに当たっている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	職員は、虐待に関する研修をしており、認知症ゆえに、虐待が見逃されることがないように、研修や日々、身体の傷や内出血等についても注意深く観察し原因を追究するようにしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	全職員が各制度について十分理解しているとは言えないが、今後研修等を利用して学び、活用できるようにしていきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約・解約時には、利用者・家族の思いを理解しながら、不安なく納得できる様な説明をしている。制度改正や報酬加算等についてもその都度説明して理解を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族会等で苦情・要望等を聞く機会を作っている。また、電話や面会時・苦情受付箱を利用して運営に反映させている。そのほか家族との会話や言葉から思いを汲み取り、ケアに反映させる様に努力している。	年三回の家族会はホームと家族を繋ぐ友好的な手段として、入居者による開会の挨拶や年に一度の大掃除を家族が手伝うなど三者が一体となって活動しており、その際入居者から生活に関する要望や、家族からの制度上の質問などが寄せられている。日々の面会時には入居者の様子を伝えながら遠慮なく意見を出してもらおうよう伝えている。	苦情相談窓口として重要事項の中に、行政等の公的機関の紹介も必要と思われる。。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の職員会議の際、全員が遠慮なく自分の意見を言えるようにし、運営に生かしている。	離職のない職場環境は法人機能と併せ職員の介護力や、姿勢など自身の力によるところが大きく、毎月の会議のみならず日常的に意見や提案を出し、本年度も入居者の生活に繋がる浴室の手すり交換などが行なわれている。代表者(管理者)は推進会議に必ず出席し、地域の意見を把握してホーム運営に直結させると共に、職員意見の収集にも努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	ホーム長始め、他の職員の業務に対する熱意・努力は認めている。職場環境等については職員会議で意見を聞き改善するようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内外の研修には積極的に参加するように奨励している。また業務関係の資格取得には休暇を利用できるよう配慮している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県の宅老所グループホーム連絡会や上益城部会への参加、また町内の事業所とは日常的に連絡を取り合い、連携している。他事業所の良い面はお互いケアに生かすようにしている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人と個別に面談する時間を設けて、本人の希望や思いを受け止めるようにしている。本人の見学や希望により体験等も受け入れ入居前の関係作りに努め、できるだけ本人のこれまでの生活を継続できる様にしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族とよく話し合い、家族の思いを受け止め、不安を取り除きながら、事業所や職員に対する信頼感を持ってもらえるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談状況を整理し、すぐに事業所で対応できない場合は、関係事業所や行政・ケアマネとの連携をとっている。初期のサービス導入では、本人・家族の思いを理解し、不安を最小限にできるように柔軟なサービス提供に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	喜怒哀楽を共にし、人生の知恵や慣わしを日常的に話したり聞いたりしながら、共に支えあう関係づくりに努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	お便りや電話連絡、定期報告・日常の面会時に利用者の様子などを伝え、職員の思いを理解してもらい、また家族の思いも理解するようにしている。本人と一緒に支えあう関係づくりに努めている		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ふるさとへのドライブや、地域の行事・イベント等に参加し、顔なじみの人と会える機会を作っている。	古くから続く地域行事に毎年出かけ馴染みの人々との再会を果たしたり、ドライブを兼ねた里帰りを支援している。家族による受診同行や墓参り、法事等の日帰り支援、自宅への泊まりや一泊旅行など入居者の思いをくみ取りながら相互に協力し、馴染みの関係を保ち地域の一員として暮らすことの出来る環境に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係性や個性を理解し、利用者同士がうまく関わりあえるように、職員がさりげなく仲介や調整をし、笑いあって過ごせる様に配慮している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居して、他施設や医療機関にいる利用者にも、入居者や職員が時折面会に行くなど、関係性が途切れないようにしている。また、町などで見かけた家族へは、声かけをして様子を伺ったり情報交換している。		

Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	時々に応じて、本人の思いを聞き、希望などを把握するように努めている。把握困難な場合でも、思いを汲み取ったり、家族からの情報収集により推し測るようにしている。	入居者の中には思いを十分に伝えることの出来る方もいるが、なかなか口にされなかったり表現困難な方へは表情や行動から推察したり、家族に尋ねながら本人の意向に添うよう努めている。ホーム長は入居者が発した言葉の中にも遠慮して逆のことを言われているのではないかと等、裏にあるものを推しはかりながら入居者の本音に近づくよう心がけている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人との会話や家族の面会時に、折に触れ、これまでの暮らしぶりやエピソード等を聞くように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居者それぞれのできることできないこと、わかることわからないこと等を、日々の変化も踏まえながら、観察や会話の中から職員全員が把握するようにしている。また気づきの共有に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	可能な限り、利用者の意見を取り入れたり、家族との関わりの中で要望を聞いたり、職員全体の意見を反映して介護計画を作成している。状態に変化があった際、現場でのケア変更は随時行っているが、ケアプランに十分反映されていない。	入居者や家族の意向をプランに反映し立案している。定期的な見直しにより入居者の現状を捉え、支援内容の継続と修正、変更を行っている。日々の細やかな変化にはその都度内容を検討し、全職員で共有して支援にあたっている。家族の面会も多く来所時にはわかりやすい言葉でプランを説明して了承を得ている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	気づきがあった時、変化があった時等、それぞれの職員が個別記録に記入したり連絡ノートに記入している。「すみれの時間」で、職員全員が情報を共有するようにしている。介護計画の見直しは十分とは言えないが行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	個々の利用者のその時々状況やニーズに応じて、できる限り柔軟な対応をするように心がけている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	文化的行事やコンサート・祭り等への参加はしている。ボランティアで舞踊や2ヶ月に1回程度、ハーモニカ演奏等してもらっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人・家族の希望を第一に考えているが、ほとんどの方が協力病院を希望されている。定期受診・緊急受診介助は事業所で行い、専門医の受診については、基本的に家族同行であるが、できない場合は事業所に対応している。訪問歯科診療がある。	本人・家族の希望するかかりつけ医を支援する事としているが、現在は全入居者が協力医療機関をかかりつけとし、定期や緊急時受診をホームで対応している。又、専門医療機関受診については、基本的に家族対応としているが、状況に応じホームでも柔軟に対応している。職員は日々のチームワークや、医師・家族と情報を共有しながら入居者の健康を支えている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	ケアで気づいた情報は、看護職に伝達・相談し、不在時も常時連絡できる体制がある。また、関連病院や併設施設看護師とも日常的に連携し、受診・看護等支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	当福祉村内に協力病院があり、日常的に連携がとれている。利用者や家族も安心して受診・入院できる。日常的になじみの病院職員がいて入院時も退院に向けた支援ができる。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や終末期のあり方について、事前指定制書を作成し、関係者で方針を共有している。地域との関係者については特に例はない。	入居時に事前指定制書をもって重度化した場合や終末期支援について意向を確認している。これまでホームでの対応を希望された事例はないが、必要があればその状況に応じ検討するとしている。	入居者・家族はホームへの信頼もあつく毎日を過ごされており、今後は重度化や終末期に対するホームの方針を文書化し説明を行う事で、更に本人・家族の安心に繋がると思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	AEDの訓練をはじめ年1回の研修や訓練は行っているが、緊急時に全ての職員が的確に実践できるかどうかについては不安が残る。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年3回の定期的火災訓練の他、災害時の研修等行っている。非常時の関連施設との協力体制や地域の運営推進委員との連絡体制はある。地震や風水害訓練は行っていない。	年三回行なう火災訓練(二回は消防署参加)や災害研修をはじめ、火元やコンセントの安全確認など日常の中で職員は意識を持って業務にあたっている。又、法人施設内の協力体制は構築されており、管理者は今後、地域消防団との連携の必要性を語っている。	これまでの火災訓練に加え、地震・風水害等の机上を含めた研修及び訓練の実施や備蓄についての検討も望まれる。又、運営推進会議メンバーや家族も参加した訓練の開催は家族の安心にも繋がると思われる。今後の取り組みに期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者を人生の先輩として尊厳の気持ちも忘れず接するよう、職員会議等においても意識して取り上げている。また、日常のケアにおいても、利用者の誇りやプライバシーを損ねないような配慮をしている。	入居者の尊厳、プライバシーに配慮したケアについて職員は日々意識を持って実践にあたっている。ホーム長は職員の言葉の端々など気になる事があれば、直接指導を行ったり、申し送りノートに記し意識付けや共有を図っている。個人情報の使用にあたっては家族へ説明を行い、重要書類は事務所内の鍵付きキャビネットで保管している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の個性を把握し、選択したりさりげなくその人らしさが出せるような場面や機会を作っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一日の過ごし方の意向も一人一人違うため、できるだけ自由に自分の好きな一日の過ごし方をしてもらっている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	個々の好みや習慣に合わせた支援や、お出かけや催しの際に、外出着を着たり日頃から化粧を楽しんでいる。時にはマニキュアをつけたりして気分転換の機会になっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	畑で採れたり家族から頂いた野菜を使った料理をしたり、食事の準備や後片付けも一緒に行っている。時々は外食したり個別の外食などをして、変化や楽しみごとを作っている。	献立は母体の栄養士が作成したものを使用しながら、野菜の差し入れを活用したり職員の工夫により家庭的な食事提供に努めている。味見やつぎ分け、茶碗洗いなど入居者のできる事を支援しながら、職員は一名の検査の他、持参した弁当と一緒に食べたり、時間をずらすなど状況に応じ撮っている。決して広くないリビング食堂は、逆に入居者同士、入居者と職員の距離を縮め会話も弾み、時には地域放送が流れる等まさに家庭の中にあるような温かい食事風景であった。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	基本の献立は併設施設の管理栄養士に立ててもらい、栄養バランスに配慮している。また、毎食の食事摂取量についても記入し、個々の状態の把握に努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	個々の状態に応じて、毎食後義歯洗浄や歯磨き・うがいなど、声掛けや介助している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	できるだけオムツを使用せず誘い排尿している。意思表示が十分できない方は、本人の排泄間隔を把握することにより支援している。はくパンツを下着とパットにする等、個別に検討し気持ちよく排泄してもらえるように配慮している。	自尊心を傷つけない声かけや誘導に配慮し、日中はトイレでの排泄を支援している。排泄用品の組み合わせや、体力が低下している方へは安眠支援の為にオムツやリハビリパンツ使用など、職員間で個々に応じた気持ちのいい排泄支援を検討し支援している。居室に設置されたトイレはいつでも使用できるよう清潔に保たれている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個々に応じて、朝一番に牛乳や水分を摂ってもらったりしている。なるべく下剤を使わない工夫をしているが、便秘の方に対しては、その人に応じた下剤の服用や食後のトイレ誘導等を心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴回数や、介助浴や見守り浴等、個々の希望や状態に即した支援をしている。職員の人数や入居者の状態により、希望に応じた入浴ができない事がある。	個々の状態に応じ介助や見守り浴に対応しながら、最低週二回の入浴支援を行っている。拒否の方へも会話や担当を変えるなど工夫しながら間隔が空かないように支援している。職員は心地良く入浴できるよう浴室の掃除を徹底し、ゆず湯を支援する場合も、数日間実施し全入居者が季節風呂を楽しめるように配慮している。	夏場など季節によっては足浴・シャワー浴などを取り入れながら、希望に応じ支援回数を増やす事が出来ないか検討いただきたい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	それぞれの習慣や個々の疲れ具合等に応じて、安心して休息できるようにしている。寝巻きに着替えてもらい、寝つけない方に対しては話し相手になったりして安心して眠れるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の説明書を個人毎に保管し、必要時にすぐ確認するようにしている。処方内容が変化した場合は連絡ノートに記入し全職員に周知している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	それぞれの利用者の得意なことや知恵や経験などを十分生かせるよう、発揮できる場面を日常的に取り入れている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天候や利用者の希望等に応じて、臨機応変に買物・ドライブ等をしている。家族の協力により墓参りや個別の旅行などに外出されている。また、地域の「お達者会」に参加して外出したりしている。	広大な法人敷地内の散歩や散策、保育園などの隣接事業所との交流は日常的に行なわれている。又、毎年恒例となったコスモス見学やその後の地元の方々の振る舞いによる昼食会は入居者・職員の楽しみとなっている事が、聞き取りや記録写真に写る入居者の表情にも表れている。家族の協力による受診・法事・墓参・旅行等の外出や地域の祭りにはボランティアによるサーポートなどホームと一緒に入居者の外出を支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者や家族の希望に応じて預かり金があり、個別に管理し、随時収支内容を確認してもらっている。可能な方は少額所持してもらい、買物時は本人が財布から支払うように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話については、希望時は支援している。身近な人に年賀状を書いたり手紙を書いたりされることに支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花をさりげなく飾ったり、利用者の写真や興味ある物を壁に貼るなどしている。狭いリビング兼食堂のため、食事の準備も見え、食事の匂いを感じたり味見したり、日常的に心地よい刺激がある。	入居者が日中の殆どを過ごすリビングは、朝・夜、随時と小まめに掃除や換気を行い快適に過ごせるように努めている。家族から差し入れられた野菜や果物も玄関先等に飾られ、季節感を感じたり食材への使い道など話題を提供している。また、室内環境と併せ福祉村という広々とした環境の中にある事も、季節を満喫しながら過ごすゆとりの時間が居心地の良さに繋がっている。	今後は共用空間の掲示物の傷みなど定期的に見直しを行い、職員のアイデアや特技を活かした空間作りに期待したい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テラスや玄関・2階のコーナーなどに、いすやテーブル・本などを置き、少人数座って、会話ができるようにしている。ホーム周囲の戸外にも休める場所がある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族と相談しながら、使っていた家具や小物や写真等を設置している。利用者に応じて、テレビやじゅうたん・コタツ等も使用している。	手作りのホームパンフレットには、ホーム全景と共に、居室環境の写真が掲示され、馴染みの品々の説明と併せ家族の参考になっている。トイレ・洗面所が付いた部屋は、コタツや家具、ジュタン・小物・写真などが家族の協力によって持ち込まれている。転倒などの心配のある方には、物品の位置を検討したり、センサーマットを使用する場合には家族への説明、了解により安全な環境に配慮している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の理解度や能力に応じて、使い方の張り紙等をして力を発揮できるようにしたり、見守りや声掛けをしてできることを支援している。洗濯や掃除・後片付け・お客様へのお茶出し等してもらっている。		